

林業実践塾 側芽剪定整枝作用「さっぽろふるさとの森」づくり

平成27年 第34号掲載

2009年から始まった植樹作業は、2012年第4期を終え、2013年から下刈りを主要作業として活動してきた。第1期の植樹は満6年経過、木も大きく育ち、除伐、剪定が必要な状態となった。今回はその作業の初回である。

小春日和で微風、作業にはもってこいの天気である。総勢17名、小林会長より今回作業の意義、目的、その方法等のレクチャーを受けたあと、各々腰鋸、手鎌、鉋、チェーンソーを手に作業開始。皆のスピードは速い、早い。無精髭だらけで歩くのも難儀だった林がみるみるすっきり、さっぱり。達成感を感じると益々スピードが上がる。

こして午前中に大半を終了。快汗の後の美味しい昼食のあとは余裕の仕上げで本日の作業終了。ピフォー、アフターの違いを実感し、来年の作業の楽しみを待つ、お土産まで頂いた一日となった

(高橋 喜三雄)

木の整形手術:側芽剪定整枝作業ドロノキ除伐作業体験記

平成29年 第38号掲載

初めての現場であったが、下刈の量としては今まで一番のボリュームである。草丈の深さ・密度も成長のスピードにビックリです。

森を育てることの大切さは理解できるが、実行することの大変さは今まであまり気にしていなかった。全国で採算が取れないからと手入れされない山林がいくかに多いことか。最近まで山林所有者が手入れも造林もすべて業者に丸投げだから採算が悪いと言われていたが、まだ一部であるが、山の所有者が自ら事業に携われれば充分採算が取れると見直され出したとの事。建設工事も全く同じで、できるだけ外注せずに工事ができれば理想的なのである。

(川原 邦孝)

私に出来ることは何だろう！

平成27年 第33号掲載

茨戸川緑地の「さっぽろふるさとの森づくり」の下刈り作業に4年ぶりに参加しました。最初にこの地に立った時は草や低木が人の背丈より高くあり、離牧地で人の生活を残していました。晴天の秋で空が高く、札幌の郊外で街の大きさを知った感じがしました。現在の地に立てた満足感と共に会長と会員仲間が計画通り進めて、6年目で「さっぽろふるさとの森」を再認識させられました。

今年は戦後70年、小や孫が再び悲惨な戦争を「起こさない・巻き込まれない」と学んだと思います。私達の年代は人間にとっての必需品は何かと問われたら、即「衣食住」と思うほど厳しい日々が戦後続きました。しかしそれよりもっと大事なものは何か？それは森なのです。知らないとか、忘れていたのではなく、優先順位に気づくのが遅かった。

会長から学んだ森づくりは野幌森林公園「かたらふの森」、樽前山麓の「樹海再生の森」、札幌市民の自然環境保全の森「水源の森」、エンジュダイラは「風景林整備の森」、そして茨戸川緑地の「さっぽろふるさとの森」と多くの活躍の舞台があります。森づくりは単に植樹をするだけではありません。育樹という忍耐と歳月の作業です。だから未来につなげていかなければなりません。

(中野 武男)

「体験林業」樽前山麓竜巻被害樹海再生の森

平成26年 第32号掲載

東急百貨店グループ労働組合結成10周年を記念した「森へ行こう！」森林ボランティアイベント札幌地区大会が樽前山麓竜巻被害樹海再生の森で開催されました。この場所は平成9年10月竜巻被害にあった苫小牧に位置する国有林です。平成10年に苫小牧営林署長との協定で測量、地拵えのあと、アカエゾマツの苗木1100本を植樹して7年間にわたって下刈り作業を継続し、守り育てる活動が行われ、今では大きく成長した森になりました。この場所を訪れるたびに、感慨深く思いがこみ上げてきます。

当時は晴天に恵まれて、セレモニーのあと5グループに分かれ、各グループごとにチーフから諸注意事項の説明を受け、腰のこ、腰なたを使って、生育のさまたげになる木を除伐・間伐作業に汗たっぶりの奮闘ぶりでした。誰もが初めての体験のようで、私たちに出来ること、森を守り育てる活動の大切さを理解し意義ある活動になりました。

昼食は支笏湖の美しい景観を楽しみながらお弁当に舌づつみ。午後は樽前山麓7合目ヒュッテから風不死岳コースの高山植物を見ながらの散策です。眼下に支笏湖の大景観を楽しみました。

(行天 純子)

日中交流の「げんきの森づくり」に参加して

平成25年 第30号掲載

以前より「小鳥の村」として有名な、藤の沢小学校に関心があり、中国の学生さんたちとの森づくり作業を楽しみにしていました。当時は生憎の天気で残念でしたが、教務の先生による、小学校の色々な取り組みをビデオで見せていただき、素晴らしい活動に感動しました。

その後、中国の学生さんたちと5年生の皆さんが色々なゲームをして楽しみました。見ている私たちの心も和みました。

現在は国同士がギクシャクしていますが、中国の学生さんたちは昼食のときにサッと立って私たちにお茶を出してくれたり、きびきびとした動きにもビックリしました。そのあと一緒に豊平峡ダムやアイヌ文化交流館の見学にも参加しました。夜は日中で色々な余興などで最高に盛り上がり素晴らしい夜を過ごしました。

森林遊びサポートセンターと中国の弓道部の皆さん、引率の内藤先生たちとの交流、その中に参加できることに沢山の幸せを感じました。また機会があれば参加したいと思っています。いろいろとお世話下さいました皆さんに感謝いたします。

(富所 静子)



野やヤマが新緑に彩られる頃、カラマツも一気に芽吹き始めます。道内には自生していませんが、人工造林樹種として植えられました。成長が早く、エゾ松、トド松が60年かかるのに30年で収穫できるそうです。雌雄同株で雄花は卵形で下向きに、雌花は直立か横向きにつきまます。湿気に強く地抗、土建洋、枕木などに利用され、使用後はチップなどに有効に利用されます。浜益に住んでいた頃、9月に近所の方がキノコ採りに誘ってくれました。カラマツ林に入ると足元は落葉でフカフカです。松の香りも潤い気分もフレッシュします。キノコ採りは初体験だったので、教えていただき、落葉の中から可愛らしいラクヨウキノコを見つけた時は感激しました。おみそ汁やおろし和えにしていたのですが、とろみのある食感は忘れられません。秋になり、きれいな黄葉したカラマツ林が夕日に照らされて黄金色に輝いている景色は、今でも目に浮かびます。

カラマツ(落葉樹)(第29号)



9月中旬のある日、自家近くのお宅の庭に赤い綺麗な実が下がっているのが目に入りました。濃いピンク色の実がはじけ、中にはオレンジ色の種が可愛らしくのぞいていました。ちよと勇氣を出して玄関の呼び鈴を鳴らしますと、80歳位のご婦人が出ていらしゃいました。ご挨拶の後、「ツリバナを絵に描きたいので、一枝いたただけないでしょうか」とお願いすると、笑顔で「どうぞ好きな枝をお持ち下さい」と。少しお話をするうちに私の兄を知っているとのこと懐かしがられ話も弾み楽しい一時でした。家に帰り、ご婦人の笑顔を想い浮かべながら早速絵を描きました。『ツリバナ(釣花)ニシキギ科』で、初夏に葉脈腋(葉が茎につく場所の上部)から長い枝を出し、枝分かれして多数の白い小花をつけます。木肌は白くなめらかで美しいので、コケシや彫刻、将棋のコマなどの材料として使われるそうです。

ツリバナ(第28号)

